くすんだ

作じめゆ

どんたく

竹久夢二作

くたんど

ゆめじ作

どんたく

竹久夢二作

この紙の裏面を活一覧ありたし
實業之日本社
出版部

この紙の裏面を活一覧ありたし
實業之日本社
出版部

郵便はがき

壹錢五厘切手

東京京橋南紺屋町

實業之日本社

出版部

御中

「どんたく」のうちにて最も好きな唄。

注意

本書は、著者歐米漫遊の記念として著されたものです。

著者は平生から、著者の詩や繪を愛好せらるる讀者に對して、何等かの機會に愛敬の意を表示したいと考へて居られました。

著者は本書の出版をその絶好機會として、ここに著者肉筆の繪畫二十枚を諸君に頒つべく本社出版部へ寄托されました。

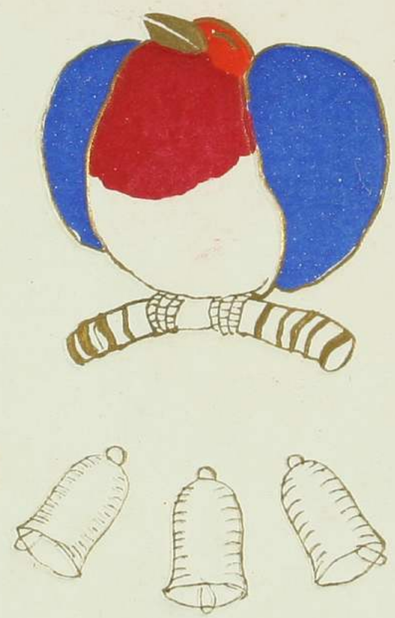
著者の意志を遺憾なく諸君に傳へるには、前記の繪畫を一枚づつ本書と共に頒てばよいのですが、著者から寄托されたのは二十枚しかありませぬ。出版部はここに著者の同意を得て、次の方法を取ることにしました。

一 「どんたく」の中にて諸君の最も愛好せらるる唄を、必ず本書包紙裏の私製はがきに記入し、輪廓の通り切抜きて送られたき事

二 本社はかれて著者より封書を以て通告されある著者自身の最も愛好し居らるる詩と對照し、これと合致せる諸君を當選者とす。當選者多き時は抽籤を以て決定す

三 〆切は十一月三十日、大正三年新年號「日本少年」及「少女の友」誌上にて發表す

ZUNDAG



どんだく

くたんど

集唄小入給

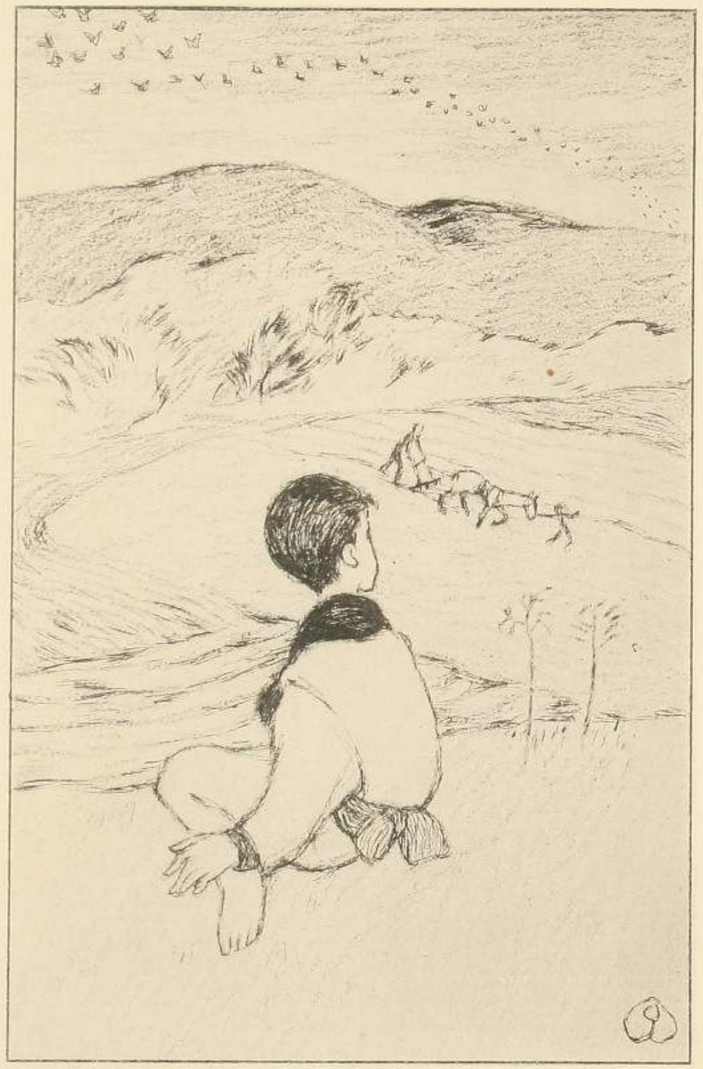
竹久夢二作及繪

愚地孝四郎裝幀

DONDUC

こはわが少年の日のいとしき小唄なり。
いまは過ぎし日のおさなきどちにこのひとまきを
おくらむ。
お花よ、お蝶よ、お駒よ、小春よ。太郎よ、次郎よ、草之助
よ。げに御身たちはわがつたなき草笛の最初のき
きてなりき。

TO



NÉMU-NO-KI NÉMU-NO-KI

NÉYA SYANSÉ.

OKANÉ GA NATTARA

OKYA SYANSÉ.

どんたく

歌時計

ゆめとうつつのさかひめの
ほのかにしろき朝の床。
かたへにはぱのあらぬとて
歌時計のその唄が
なぜこのやうに悲しかろ。

ゆびきり

指をむすびて「マリヤさま
ゆめゆめうそはいひませぬ」
おさなききみはかくいひて
涙うかべぬ。しみじみと
雨はふたりのうへにふる
またスノウドロップの花びらに。

紡車

しろくねむたき春の晝
しづかにめぐる紡車。
をうなの指をぐる糸は
しろくかなしきゆめのいと
をうなの唄ふその歌は
とほくいとしきこひのうた。
たゆまずめぐる紡車

もつれてめぐる夢と歌。

人買

秋のいり日はあかあかと
蜻蛉とびゆくかはたれに
塀のかげから青頭巾。

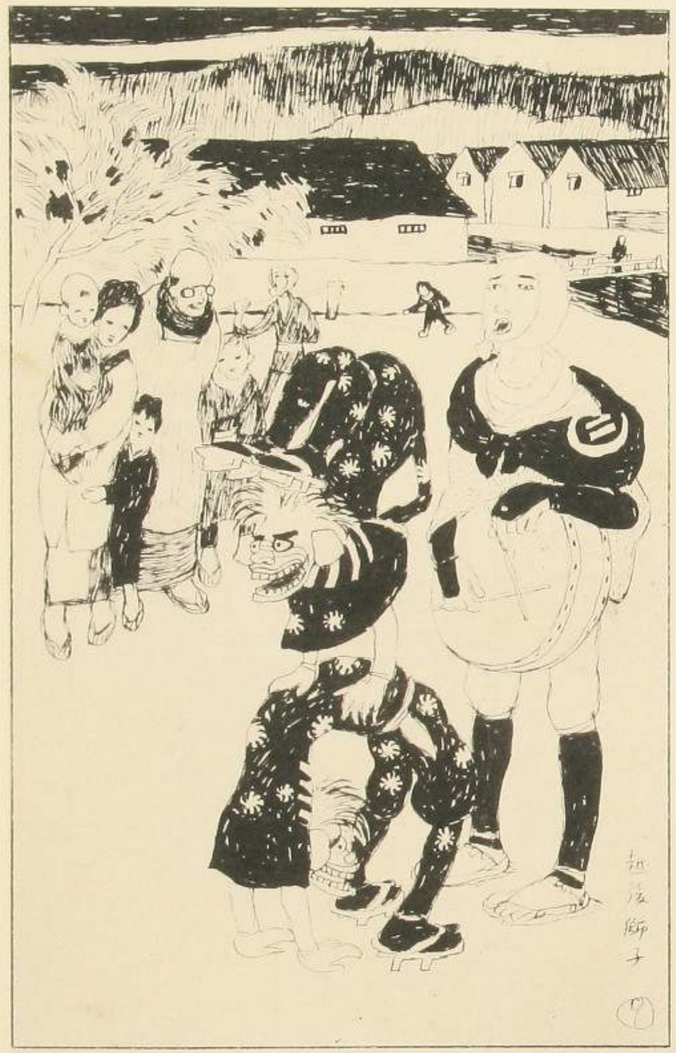
「やれ人買ぢや人買ぢや
どこへにげようぞかくれうぞ
赤い蜻蛉がとびまはる。

六地藏

背合の六地藏
としつきともにすみながら
ついぞ顏みたこともない。
でもまあ苦にもならぬやら
いつきてみても年とらず
赤くはげたる涎掛。

越後獅子

角兵衞獅子のかなしさは
親が太鼓うちや子がおどる。
股のしたから峠をみれば
もしや越後の山かとおもひ
泣いてたもれなともどもに。
角兵衞獅子の身のつらさ。



輪廻はめぐる小車の
蜻蛉がへりの日もくれて
旅籠をとろにも錢はなし
あひの土山あめがふる。

赤い木の實

雪のふる日に小兎は
あかい木の實がたべたさに
親のれたまに山をいで
城の門まできはきたが
あかい木の實はみえもせず
路はわからず日はくれる
ながい廊下の窓のした

なにやら赤いものがある
そつとしのむできてみれば
こは姫君のかんざしの
珊瑚のたまかはつかしや
たべてよいやらわるいやら
兎はかなしくなりました。

鐘

村で名代の鐘撞男
月がよいのでうかうかと
鐘をつくのもつひわすれ
灯のつく街がこひしさに
山から港へではでたが
日がくれるのに山寺の
鐘はつんともならなんだ

村長さまはあたふたと
鐘撞堂へきてみれば
伊部徳利に月がさし
ちんちろりんがないてゐた。
アトレの馬ではあるまいし
鐘がならうがなるまいが
子供のしつたことでなし
うらの柔園の椎の木に
ザボンのやうな月がでた。

ゆく春

くれゆく春のかなしさは
白髪頭の蒲公英の
むく毛がついついとんでゆく
風がふくたびとんでゆき
若い身そらで禿頭。

くれゆく春のかなしさは
鶯の花をつみとりて
とんとたたけば馬がでる
そっとはらへば牛がでる
でてはぴょんぴょんにげてゆく

くすり

雪はしんしんふりしきる。
炬燵にあてたふこはらが
またしくしくといたむとき。
雪はしんしんふりしきる。
しろくつめたき粉ぐすり
熱ある舌にしみるとき。

雪はしんしんふりしきる。
黄な袋の石版の
異形な蟲のわざはひか。

雪はしんしんふりしきる。
銀ぎらぎんのセメン圓
とのもは雪のつむけはひ。

雀踊

青い眉したたなやめが
金の墨繪の扇にて
そつとまねけばついとくる
はらりとひらげばばつととぶ。
雀おどりのおもしろさ
やんれやれやれやせうめ
京の町のやせうめ

うつるるものはみせうめ
あれあれあれとみるほどに
奴姿の小雀は
山のあなたへとびさりぬ。

わたり鳥

日本の春のこひしさに
シイオホスクの海角より
はるばる波をわたり鳥。

庄屋の軒に巣をかけて
雛を六羽うんだれど
三羽の雛は死ました。

のころ三羽は柿の葉の
毛蟲がすきでたべました。

やんがて柿のうれるころ
日本の島をあとにして
まだみもしらぬ故郷へ
親子もろともいにました。

納戸の記憶

船は酒船父の船
三十五反の帆をまくや
玄海灘の夏の雲。

君は馬關の唄うたひ
髪にさしたる青玉
あだな南のニグレスが

こころづくしの貢物。

風のたよりをまちわびて
行燈のかげのものおもひ
鬢のほつれをかきあぐる
銀のかざしのかなしさか
母の腕のさみしさか。

おしのび

昔アゼンに王ありき。
野にさく花のめでたさに
ひとり田舍へゆきけるが
にわかに雨のふりいでて
王は臍までうまりける。
それより王はわすれても
二度と田舍へゆかざりき。

斷章

1

ドンタクがきたとてなんになろ
子供は芝居へゆくでなし
馬にのろにも馬はなし
しんからこの世がつまらない。

2

おうちに屋根がなかつたら
いつも月夜でうれしかろ。

あの門番が死んだなら
あの柿とつてたべよもの。
世界に時計がなかつたら
さみしい夜はこまいもの。

3

もしも地球が金平糖で
海がインクで山の木が
飴と香桂であつたなら
なにをのんだらいいだろう。

學校の先生もしらなんだ
國王樣もしらなんだ。

4

この紅茸のうつくしさ。
小供がたべて毒なもの
なぜ神樣はつくつたろ。
毒なものならなんでまあ
こんなにきれいにつくつたろ。

5

ままごとするのもよいけれど
いつでもわたしは子供役。
子供が子供になつたとて
なんのおかしいことがあろ。

6

どんなにおなかがひもぢうても
日本の子供はなきませぬ。

ないてゐるのは涙です。

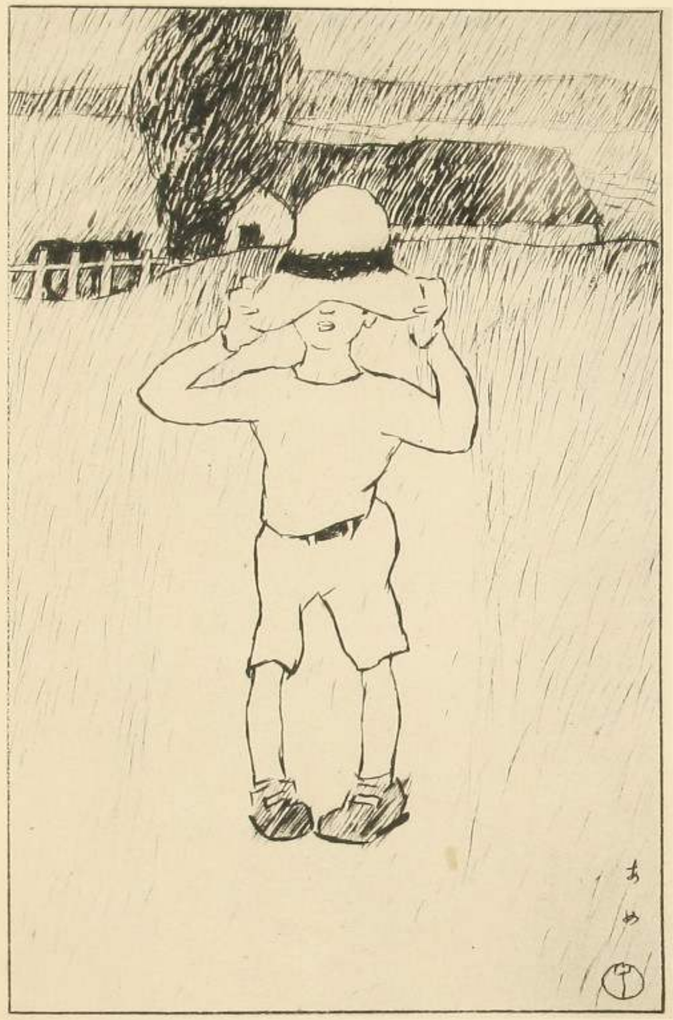
7

お墓のうへに雨がふる。
あめあめふるな雨ふらば
五重の塔に巣をかけた
かわい小鳥がぬれるもの。
松の梢を風がふく。
かぜかぜふくな風ふかば
けふ巣だちした鳶の子が

路をわすれてなかうもの。

8

ひろい空からふる雨は
森のうへにも牧場にも
びつくり草にも小鳥にも
みんなのうへにふるけれど
子供のうへにはふりませぬ。
それは子供の母親が
ジョッポをきせてくれるから。



9

枇杷のたねをばのみこんだ。
おなかのなかへ枇杷の木が
はえるときいてなきながら
枇杷のなるのをまってたが
いつまだたってもはえなんだ。

10

めんない千鳥の日もくれて

おぼろな春のうすあかり
この由良鬼のいとほしさ
ほどいてたもとなきいでぬ。

11

越中富山の薬賣り
おはぐろとんぼがついとでて
白いカサモリ傘の柄にとまり
また日まわりの葉にとまり
ついととんではまたもどる。

12

お遍路さんお遍路さん
おやまのむかふは雨さうな
霰をおくれ豆おくれ
まめがなければこの路法度。

13

股のしたから麓をみれば
さても繪のよなよい景色。

どこの町ぞときいたらば
それはわたしの村でした。

14

梭の手なやめ歌ふなきけば
——もつれた糸なら
ほどけもせうが
きれた糸ゆゑ
せんもなや。

少年なりし日

人形遣

めでたやなめでたやな
さりとはめでたやめでたや」と
紺の布の籠のつまはづれ
人形遣がきたさうな。

母のかげよりそとみれば
人形遣のうら若く

「まゝどうしよぞいの」と泣きいれば
襟足しろくいぢらしく
人形の小春もむせびいる。

もののあはれかふるあめか
もらひなみだの母の袖。

雪

赤いわたしの襟巻に
ふわりとおちてふときえる
つもらぬほどの春の雪。
これが砂糖であつたなら
乳母もでてきてたべふもの。
ロシヤ更紗の毛布團を
そつとぬけでてつむ雪を

銀のかざしでさしてみる
お染の髪の牡丹雪。

七番蔵の戸のまへで
手招きをするとうじさん
顔ににげない白い手で
ひねり餅をばくれました。

納戸のおくはほのくらく
紀州蜜柑の香もあはく

指にそまりし黄表紙の
炬燵で繪本をよみました。

窓からみれば下町の
角の床屋のガラス戸に
大阪下り雁二郎の
春狂言のぴらの繪が
雪にふられておりました。

かくれんぼ

あの畑にみいさんと
ふたりかくれてまつてゐた。

とほくで鬼のよぶ聲が
風のまにまにするけれど
ちらちらとぶは鳥の影。

てどくらせど鬼はこず。
森のうへから月がでた。

郵便函

郵便函がどうしたら
そんなにはやくあるくだろ。
わたしの神戸のおばさまへ
わたしのすきなキャラメルを
おくるやうにとしたためて。
郵便函へあづけたが
三つほどれたそのあした

わたしのすきなキャラメルは
ちやんとわたしについてゐた。

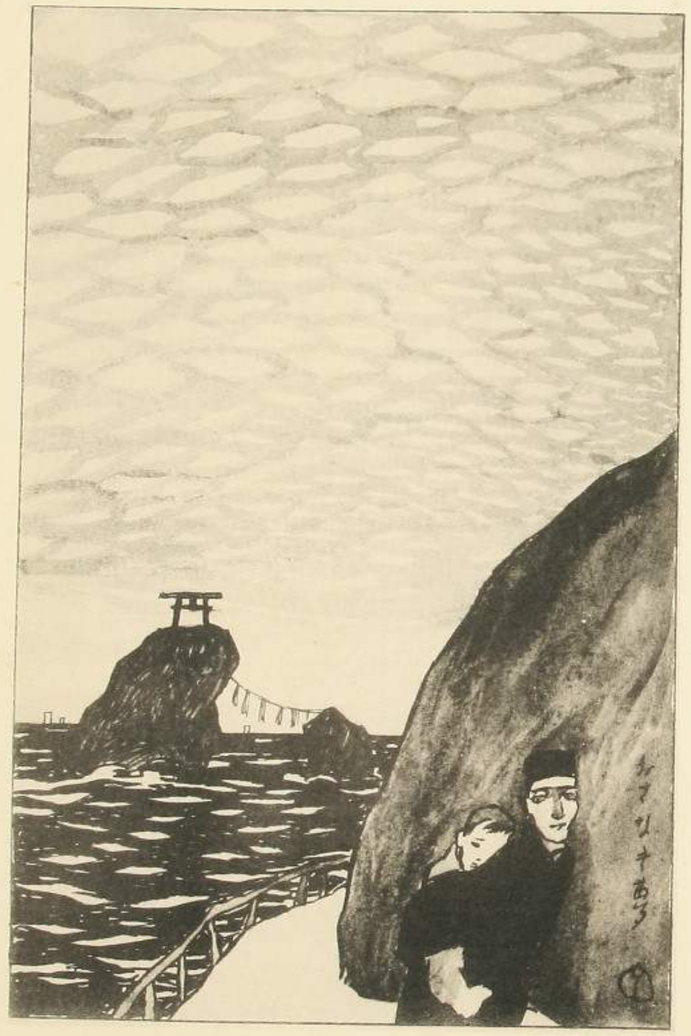
山賊

乳母の在所は草わけの
山また山の奥でした。
ある日のことに姉として
乳母をたづねにゆきました。
わたしは土産を腰につけ
姉は日傘をさしかけて
赤土色の山路を

とぼとぼあゆむ午下り。
あゆみつかれて路ばたの
一本松に腰かけて
虎屋饅頭をたべながら
やすむでゐると木蔭より
髯武者面の山賊が
ぬっくとばかりあらはれた。
すわことなりとおもへども
どうすることもなきごえに
「おっつけ伴者のくる時刻」

きこえふがじに姉のいふ
「どうして伴者はくることか」
わたしは姉にききました。
さうするうちに山賊は
腰の太刀おっとりて
のそりのそりとやってきた。
もう殺すかとおもふたら
殺しもせいでたちとまり
「どこへおじやる」ときくゆゑに
つつみかくさずいひますと

「よいお子たち」とほめながら
峠をおりてゆきました。
乳母はきいて大笑ひ
「なんの賊などでませうぞ」
それは木樵でありました。



おさなき夢

夢のひとつは　かくなりき。

青き頭巾をかぶりたる
人買の背にないじやくり
山の岬をまはるとき
廣重の海ちらとみき。
旅の道者がせおいたる

天狗の面のおそろしさ
にげてもにげてもおふてきた。
伊勢の國までおちのびて
二見ヶ浦にかくれしが
ここにもこわや切髪の
淡島樣の千羽鶴
一羽がとべばまた一羽
岩のうへより鳥居より
空一面のうろこ雲。
顏もえあげずなきぬたり。

草餅

ある日學校へゆく路に
黄な袋がおちてゐた
ひろうてみればこはいかに
それは財布でありました。
「さあ大變ぢや大變ぢや
錢をひろへば尋人
有司へよばれようおお怖や」

みながはやせばとつおいて
財布を指でさげたまゝ
こりやまあどうしたものだらうぞ
そこへおりよく先生が
おいでなされて「やれやれ」と
財布をとつてくれました。

それから家へかへつたが
どうも財布が氣にかかり
母の情の草餅も

どうまあ咽喉をこすものぞ
食べずに泣いておりました。

嘘

なげた石
鳥居のうへにのつかれば
どんな願もかなへんと
氏神様はのたまひぬ。

鳥居のしたにあつまりし
太郎に次郎に草之助

何がほしいときいたらば
太郎がいふには犬張子
次郎がいふにはぶんまはし
生きた馬なば草之助。
願をこめてなげた石
首尾よく鳥居へのつかつた。
石は鳥居へのつたれど
いまだに何もくださらぬ。

どんだく

どんたくぢやどんたくぢや
けふは朝からどんたくぢや。
街の角では早起きの
飴屋の太鼓がなつてゐる
「あアこりやこりやきたわいな」
これは九州長崎の

丸山名物ぢやがら糖
お子様がたのお眼ざまし
甘くて辛くて酸くて
きんぎよくれんのかくれんぼ
おつぺけぽうのきんらいらい」

觀音堂の境内は
のぞきからくり犬芝居
「ものはためしぢやみてござれ
北海道で生捕つた

一本毛のないももんがあ
繪看板にはうそはない
生きてゐなけりや錢やいらぬ」

「可哀さうなはこの子でござい
因果はめぐる水車
一寸法師の綱わたり
あれ千番に一番の
鐘がなろともお泣きやるな」

「やあれやれやれきたわいな
のぞきや八文天保錢
花のお江戸は八百八町
音にきこえた八百屋の娘
年は十五で丙午
そなたは十四であらうがの
いえいえ十五でござんす。
八百屋お七がおしおきの
お眼がとまれば千客樣」

郵便脚夫

「郵便ほい
おかみの御用でふっさっさ」
郵便脚夫のうしろから
學校がへりの子供らは
ふっさもっさとついてゆく。
「郵便ほい
おかみの御用でもっさっさ」

江戸見物

「江戸をみせよう」源六は耳をつまんでつりあげた。いたさこらへて東をみれどれが江戸やら山ばかり。

「なんとみえたであらうがな」

「みえはみえたが淺草も上野もやつぱり山だらけ」

七つの桃

七人の
遊仲間のそのひとり
水におぼれてながれけむ。
お芥子の頭が水の面に
うきつしづみつみえかくれ。
「よくも死人をまねたり」と
白痴の忠太は手をたたく。

水にもぐりて菱の實を
とりにゆけるとおもひしが。
人は家より畑より
ただごとならぬけはひにて
はしりて河にあつまりぬ。
人のひとりは水にいり
人のひとりは小舟より。
死骸を岸にだきあげぬ。
「死んだ死んだ」と踊りつつ
忠太は村をふれあるく。

白い衣きた葬輦が
暑い日中をしくしくと
鳥邊の山へいりしかど
そは何事かしらざりき。
ひとりは墓へゆきければ
七つの指を六つおりて
一つのこしてみたれども
死んでなくなることかいな
いつか墓よりかへりきて
七つの桃をわけようもの。

猿と蟹

わたしが猿で妹が
あはれな蟹でありました。

猿はひとりで柿の實を
木に腰かけてたべました。
「兄さんひとつ頂戴よ」
あはれな蟹がいひました。

「これでもやろ」と澁柿を
なげてはみたがかあいそで
好いのもたんとやりました。

加藤清正

紙の鎧の清正は
虎を退治の竹の槍。
屋根のうへにて眠りねし
猫をめがけてつきければ
虎は屋根よりころげおち
縁のしたへとかくれけり。

さすがに猛き清正も
虎のゆくえの氣にかかり
夜な夜なこわき夢をみき。

禁制の果實

白壁へ
戯繪をかきし科として
くらき土藏へいれられぬ。
よべどさけべど誰ひとり
小鳥をすくふものもなし。
泣きくたぶれて長持の
蓋をひらけばみもそめぬ

「未知の世界」の夢の香に
ちいさき靈は身にそはず。
窓より夏の日がさせば
國貞ゑがく繪草紙の
「修紫」の桐の花
光の君の袖にちる。
廳耶の谷間にほろほろと
頻迦の鳥の聲きけば

悉多太子も泣きたまふ。

魔性の蜘蛛の絲にまかれ
白縫姫と添臥しの
風は白帆の夢なのせ
いつかうとうとれたさうな。

藏の二階の金網に
赤い夕日がかっとてり
さむれば母の膝まくら。

日本のむすめ

宵待草

まてどくらせどこぬひとを
宵待草のやるせなさ
こよひは月もでぬさうな。

わすれな草

秋の風を身にしめて
ゆふべゆふべのものおもひ。
野ずえはるかにみわたせば
わかれてきぬる窓の灯の
なみだぐましき光かな。
秋をだいて木によれば

やぶれておつる文がらの
またつくろはむすべもがな。

わすれな草よ
なれが名を
なづけしひとも泣きたまひしや。

夏のたそがれ

タンポポルの鐘が
さはやかになりいづれば
トラピストの尼は
こころしづかに夕の祈禱をささげ
すぎし春をとむらふ。
柳屋のムスメは

はでな浴衣をきて
いそいそと鈴蟲をかひにゆく
——夏のたそがれ。

うしなひしもの

夏の祭のゆふべより
うしなひしものとめるとて
紅提燈に灯をつけて
きみはなくなくさまよひぬ。

芝居事

雪のふる夜のつれづれに
姉の小袖をそとかつぎ
……でんちうぢやはりひじぢや
しまさんこんさんなかのりさん……
おどりくたびれ袖萩の
肩に小袖をうちかけて
なみだながらの芝居事

「さむかろうとてきせます。ろ。
このまあつもる雪わいの。

花束

ありのすさびに
花をつみてつがねたれど
おくらむひともなければ
こころいとしづかなり。
されどなほすてもかねつつ
ゆふべの鐘をかぞへぬ。

たそがれ

たそがれなりき。かなしさを
そでにおさへてたちよれば
カリンの花のほろほろと
髪にこぼれてにほひけり。

たそがれなりき。路をきく
まだうら若き旅人の

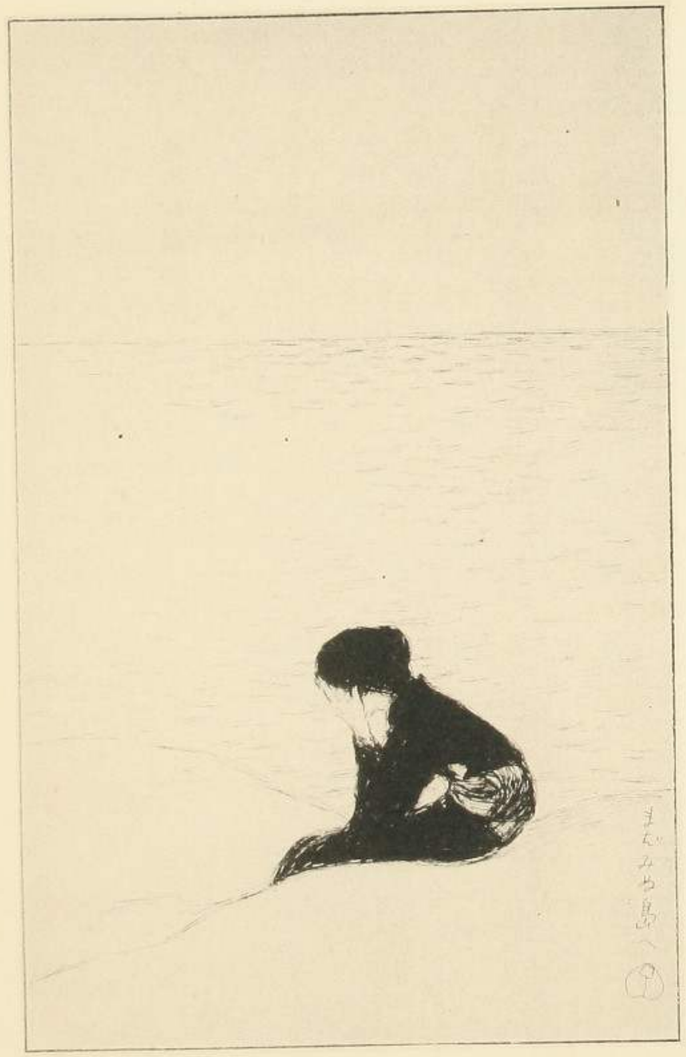
眉の黒子のなつかしく
後姿のなかれけり。

かへらぬひと

花をたづねてゆきしままかへらぬひとのこひしさに
岡にのぼりて名をよべど
幾山河は白雲の
かなしや山彦かへりきぬ。

よきもの

「よきものをあたへむ」ときみのいふゆゑ
ゆびきりかまきりいつはりならじと
きみのいふゆゑ
門のそとにてきみまちぬ。
井戸のほとりの丁子の花よ。



見知らぬ島へ

ふるさとの山をいでしより
旅にいくとせ
ふりさけみれば涙わりなし。

ふるさとのははこひしきか。
いないな
ふるさとのいもとこひしきか

いないいな。
うしなひしむかしのわれのかなしさに
われはなくなり。

うき旅の路はつきて
あやめもわかぬ岬にたてり。

すべてうしなひしものは
もとめむもせんなし。
よしやよしや

みしらぬ島の
わがすがたこそは
あたらしきわがこころなれ。

いざや　いざや
みしらぬ島へ。

てまり

……ひや　ふや　おこまさん
たばこのけむりは丈八っあん……
とんとんとんとつくてまり
しろい指からはなれては
蝶が菜のはなをなぶるよに
やるせないよにゆきもどり。
ゆらゆらゆれる伊達帶から

江戸紫の日がくれる
……みや　よや
夕霧さん……

たもと

そっといだけばしんなりと
あまへるやうにしなだれかゝる
――わたしのたもと。
はづかしさの顔をおほへど
つゝむにあまるうれしさがこぼれでる
――わたしのたもと。

わたしのかなしみも
わたしのよろこびも
みんなおまえはしってゐる
——にくらしいたもとよ。

かげりゆく心

母にそむきしその夜より
白壁によるならはせに
露草の花さきにけり。

こゝろもとなき夕月の
夢の小徑にきえゆけば
れもたえだえに蟲なけり。

雀の子

とこどんどこびいひやらひやあ
麥の畑を風がふく。

役者の群をはぐれたる
子供心のはかなさは
……うちの裏のちさの木に
雀が三羽とうまつて

一羽の雀がいふことにや
ゆうべござった花嫁御
なにがかなしゆてお泣きやるぞ
おなきやるぞ……

ゆうべの芝居のその唄が
いまのわが身につまされて
ほろりほろりとないてゆく。

異國の春

につぽんムスメのなつかしさ
牡丹芍藥やま櫻
金蘭緞子のオビしめて
ふりのたもとのキモノきて
丹塗のポクリれもかろく
からこんからことゆきやるゆえ
どこへゆきやるときいたらば

娘ざかりぢや花ぢやもの
後生よいよに寺まゐり。
寺まゐり。

白壁へ

ふたりはかきぬ。
「しらぬこと」
ふたりはかきぬ。
「よろこび」と
ふたりはかきぬ。

「さよなら」と。

著者

竹久夢二

大正二年十一月一日印刷
大正二年十一月五日發行

東京市京橋區南鞘屋町十二番地
發行者 增田義一

東京市芝區愛宕町三丁目二番地
印刷者 笠間音次

東京市京橋區南鞘屋町十二番地
發行所 實業之日本社

定價五十錢

東洋印刷株式會社印刷

不許複製